

小山弥兵衛と孫娘・心諒尼（全鏡）

江戸時代中期、天災による凶作続きと過酷

な取り立てにより、但馬地方でも農民の暮らしは困窮を極めていました。1738（元文3）年、庄屋たちは銀山を管轄する生野代官所へ年貢減免を訴えますが、三千人もの集団に膨れ上がり百姓一揆とみなされます。庄屋など六名が京都三条河原で処刑、東河の庄、野村（現・朝来市和田山町野村）の村年寄・小山弥兵衛など八名が遙か遠く壱岐の島に配流となりました。

見性寺に預けられた弥兵衛は、荒地ながらも土地を与えられ、農業を中心に生活しながら、捕鯨をする人たちに、すべりにくいわらじを編み、子どもたちに読み書きを教え、用材となる杉を千本も植えるなど島の発展に貢献しました。

一方、弥兵衛の孫娘は、僧になれば自由に旅ができる、祖父に会いたい一心から、幼くして桐葉庵（現・桐葉寺 朝来市山東町矢名瀬）

で出家、全鏡と名を改め修行します。1789（寛政元）年、二十四歳になった全鏡は、壱岐の島に向け旅立ちます。鳥取・下関を経て、福岡の安国寺の助力により壱岐に渡り弥兵衛と対面。弥兵衛が八十五歳で亡くなるまでの三年余り、月に一度、島に渡り、身の周りを世話し、遺骨を抱えふるさとに戻りました。島での功績や孫娘の孝心により弥兵衛の墓には、流人としては異例の戒名が刻まれています。

帰郷後、野村の水月庵（現・水月院）を再興した全鏡は心諒と名を改め、多くの人々に愛されながら、1843（天保14）年、七十九歳の生涯を閉じました。全鏡は一度目の帰郷の折、弥兵衛が育てたクスノキの苗二本を持ち帰っています。うち一本は今も東河の法宝寺境内（朝来市和田山町岡田）で年輪を刻んでいます。

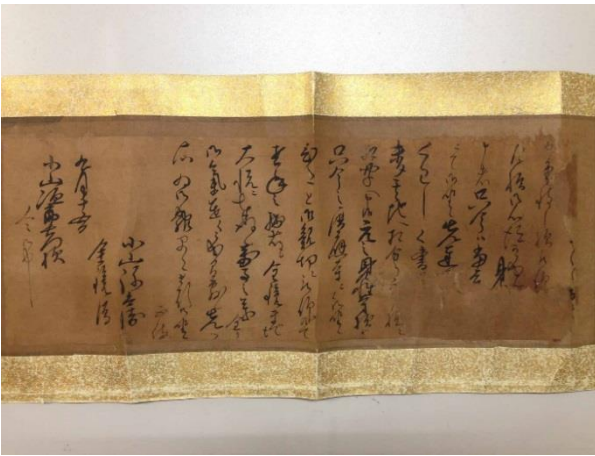


【心諒尼頂相（ちんぞう）】

水月院所蔵・朝来市埋蔵文化財センター寄託

江戸末期に描かれた心諒尼の頂相

* 頂相（ちんぞう）… 禅僧の肖像画

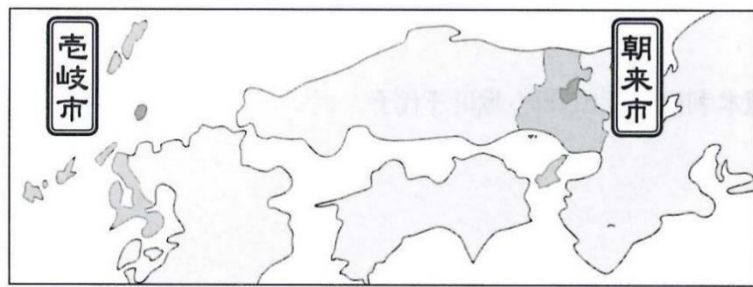


【小山弥兵衛・全鏡書状（朝来市指定有形文化財）】

水月院所蔵・朝来市埋蔵文化財センター寄託

全鏡と対面した弥兵衛が、1789（寛政元）年9月に、息子（全鏡の父）に宛てて書いた連名の書状です。「ひたと御親切に仰され候て 老年の拙者も全鏡までも 大悦に存じ奉り候、万事の義、全く御気遣い成られまじく候（たいへん御親切におっしゃっていただいて 年老いた私も全鏡までも たいへんよろこんでいます。万事の事は、全く御気遣いされることはありません）」と配流から約50年後に劇的な出逢いを果たした二人の喜びが伝わってきます。

兵庫県朝来市役所 和田山地域振興課作成 2016.10



○文芸作品について
1958（昭和33）年、壱岐の郷土史家・堀川誠太郎さんが旧芦辺町（現・壱岐市芦辺町）の曆心寺跡で小山弥兵衛の墓を発見。その墓石に戒名があることから調査に取り掛かり、新聞の全国版に広告を出し、子孫を探しあて、翌年、関係者の墓参が実現しました。1964（昭和39）年には、小学生毎日新聞に作・西瀬英一さん、絵・中田敏夫さん「おいきの旅」が連載され、1989（平成元）年には、和田山町教育研究所が絵本「おじいさんをたずねて」を出版。1999（平成11）年には、日本ミュージカル研究会主宰・高井良純さん演出によるミュージカル「心を繋ぐ子守唄〜心諒尼物語」が上演されるなど様々な作品で紹介されてきました。

2000（平成12）年には、柴田東一郎さん（朝来市和田山町在住）が「遙かなり壱岐〜流人小山弥兵衛と心諒尼の物語」を自費出版。1984（昭和59）年に東河小学校の職員旅行で壱岐を訪れ、弥兵衛が義人として顕彰されてきたことに感銘を受けて以降、何度も壱岐を訪れて書き上げた力作で、後に脚本家、吉村ゆうさんが劇化・演出。2015（平成27）年には、友好都市提携を記念して壱岐市の市民劇団、一支国座（現・劇団未来座・壱岐）による公演が朝来市で上演されました。また、朝来市でも地元の人たちの大型紙芝居により、後世に語り継がれています。

